産大法学　47巻3・4号（2014.1）

資　　料

エルンスト・ユンガーとナチズム（1）

川　合　全　弘

筆者は北大ドイツ史研究会から、カール・シュミットの場合と異なり、なぜエルンスト・ユンガーがナチズムに屈しなかったのか、という問題について報告するよう要請を受け、2013年7月6日に同研究会において「エルンスト・ユンガーのナショナリズム論 ―― 伝記と思想 ――」と題する報告を行った。本稿は、上記報告に基づき、言わばその資料編として、ユンガーがワイマール期に自らのナチズム観を披瀝した論文の邦訳を試み、以て初期ユンガーとナチズムとの交錯関係の解明に寄与しようとするものである。

ユンガーとナチズムとの関係を考察する際には、ナチズムが体制と化した1933年以降だけを見るのでなく、ワイマール期における両者の関係の出発点に着目することが必要である。というのもユンガーは、当時、国民革命を志向する急進ナショナリストとして、ワイマール期の政治的配置においてナチ党とほぼ同じ陣営に属していた、とも言いうるからである。この点を重視するならば、両者の関係は、「なぜユンガーがナチズムに屈しなかったのか」と問うよりも、むしろ「なぜユンガーがナチズムと別れたのか」と問う方が適切である[(1)]。すなわち、両者の関係は、互いに異質な二者の中の一方があくまで自らの特質を維持することによって強大な他方に「屈しなかった」関係というよりも、元は同質と思われた二者の中の一方が次第に自己と他方との間に潜在する異質性を見出すことによって「別れていった」関係として要約するべきであろう[(2)]。

ユンガーとナチズムとの最初の公的な接触は、1923年に遡る。この年の8月末に国防軍を退職したユンガーは、翌9月にナチ党の機関紙『フェ

ルキッシャー・ベオーバハター』に、「革命と理念」と題する、彼自身にとって最初の政治評論を寄せた。その中でユンガーは革命勢力としてのナチズムに対する期待を次のように表明している。「真正の革命はまだ全く起こっていない。それは不断に近づきつつある。それは決して反動ではなく、むしろ革命のあらゆる特徴と表現を備えた本物の革命である。それの理念は、これまでにないほど鋭く磨き抜かれたフェルキッシュの理念であり、それの旗はハーケンクロイツである。それの表現形式は一点への意志の集中、すなわち独裁である。[3]」

ナチズムに対するユンガーの二度目の接触は、ユンガーが1926年6月に革命的ナショナリスト陣営の大同団結を呼びかけた自らの論文「結集しよう[4]」をヒトラーに送ったことによる。このときヒトラーは個人秘書ルードルフ・ヘスを通じてユンガーに返書を送り、当時ライプツィヒに住んでいたユンガーを訪問する意向を伝えた。ユンガーはこれを承諾したが、ヒトラーの予定が変更されたために、両者の出会いは実現しなかった。[5]

これ以降、ユンガーとナチズムとの交渉は、主にヨーゼフ・ゲッベルスを窓口として行われるようになった。ベルリン管区長（1926年）、党宣伝部長（1929年）、宣伝大臣（1933年）を歴任するゲッベルスが、この頃から知識人の組織化の任務を担当するようになったからである。1927年2月16日、ユンガーは国民革命派の盟友ヘルムート・フランケに誘われ、ベルリンで開かれたナチ党の会合に参加してゲッベルスの講演を聴いた後、フランケの自宅でゲッベルスと会談した。この初めての出会いは双方に幻滅をもたらした。ユンガーは政治宣伝の域を出ないゲッベルスの型通りの話しぶりに落胆し、他方ゲッベルスは持論に固執して行動に出ようとしないユンガーの頑なな姿勢にひ弱な文士の姿を見た。[6]その後の推移に照らせば、このときの両者の幻滅が、ユンガーとナチズムとの関係の変化を象徴する出来事であるかのように思われる。

この物別れに終わった会談の一ヶ月後、ユンガーは、恐らくゲッベルスに対する再度の態度表明を企図して、フランケらとともに彼自身が編集人を務める雑誌『アルミニウス』に、「ナショナリズムとナチズム」と題す

る一文を掲載した[7]。次に訳出した文章がそれである。その中でユンガーは、自らの革命的ナショナリストの立場を「ナショナリズム」と呼んだ上で、そのナショナリズムとナチズムとの協力関係を追求する一方、理念の純粋な把握を優先する「精神的運動」たるナショナリズムと組織的な実践を優先する大衆政党たるナチズムとの原則的立場の相違を確認している。ユンガーの理念重視の姿勢は、先に言及した最初の政治評論「革命と理念」でも表明されているが、ここではそれが大衆組織政党の特質との対比を通じていっそう鋭く強調されている。恐らくは、ユンガーのナショナリズムが本物の政治でなく、文学ないし文壇政治にすぎない、と見たゲッベルスとの前月の対立を念頭に置き、それへの反論を試みたものではなかろうか。またこの論文の中でユンガーがナチズムを「あらゆる運動の中で最も現代的で、最も進歩した運動」と特徴づけていることも、当時におけるユンガーのナチズム評の特徴を知る上で、重要であろう。

ナショナリズムとナチズム

エルンスト・ユンガー

ナショナリストは内面的態度の理念を追求し、この追求がいかなる場から出たものであれ、あたかも球面上のどの点からも球の中心へと直接に到達しうるのと同様に、それらの追求努力を全て同類と見なす。この場合、組織は全く異なる振舞い方をせざるをえない。というのも、組織の力にとって、まさしく同じ性質を持つ努力こそは最大の危険を意味するからである。しかしながらナショナリズムが自らを組織化することを一度も試みたことがない以上、多くの組織は、自分が傷つけられるかもしれないという疑いを持つことなしに、ナショナリズムの言葉を受け入れることができたのである。

ナショナリズムが自らの考えを表明するために用いた主に文学的な活動は、従来しばしば非難の的とされてきた。この非難に対しては、精神的な

運動は実際的な手段と異なる手段を必要とする、と応えられよう。というのも、実際的な活動は、まさしくこのような非難によってその欠陥を露呈するのが常だからである。ヒトラー自身が恐らくはドイツ最大の演説家であるように、ナチズムが一連の主に演説家的な才能の持ち主を前面に押し出してきたことは、決して偶然でない。しかし夙にティエールはそのフランス革命史において、聴衆にはたしかに即時の作用が及ぼされるものの、読者にはいっそう持続的な作用が及ぼされる、と述べている。したがって、実行に移るまでの段階においては、このような非難は適切な意味を持たない。また我々を老兵と目して、行為の瞬間にはきっと安全地帯にとどまるにちがいない、と単純に思い込むべきではない。しかし力強い言葉が決断のときにのみ意味を持つ以上、幕間の時期には、自分が決断のためにいかなる価値を掲げようとするのかを熟考することは、恐らく無駄なことではあるまい。この熟考が念入りに、そして私の知る限りでは非実際的な仕方で行われなければならないことは、事柄の本質に属する。「ここに私は立つ。私にはこれしかできない」という言葉は、それが空言でないとするならば、それに先立って、吟味と内面の準備との時期を必要とする。はたして我々は、我々の最高の知と良心とに照らして、我々の言葉を、どんな闘争においても保ちうるほどに吟味し鍛え上げた、と言いうるであろうか。戦争のことを思い起こしてみよう。我々があの戦争に敗れたのは、組織の欠如ゆえでなく、むしろ我々が戦争を勝ち取ることができるほど十分に内面的に成熟していなかったからである。なるほど幾多の兵隊が戦闘を行う。そして防寒具に身を包んで整列する兵士の姿は壮観である。しかし銃弾はことごとく空疎な理念のために放たれるか、無駄に放たれるかするのみである。それゆえひとは、内面的に難攻不落となる前に、第一歩を踏み出すことはできないのである。ナチズムの歴史がこのことを証明している。なぜミュンヒェン蜂起はかくも驚くべき結末を迎えたのであろうか。裏切りによって。―― よかろう。しかしながらこの場合、裏切りなどというものは、戦争末期の“背後からの一突き”と同様、本来の要因でない。本質的な原因は、ナチズムが自らの任務の独自性をまだ十分明確に把握してお

らず、それゆえ全く異なる内面的構造を持つ盟友の可能性についてまだ決断することができなかった、という点にある。またナチズムは、当時すでにあらゆる運動の中で最も現代的で、最も進歩した運動であったにもかかわらず、そのことを全く自覚していなかった。ナチズムがこの失敗を生き延びたことは、ナチズムに力が備わっていたことの最良の証拠である。この間、必要な対決が行われてきたし、今後も多くの対決が行われなければならないであろう。それも、単に組織としての形態において異質な諸運動との対決のみならず、とりわけこれらの運動にそれぞれの内容を付与している精神的空間との対決が行われなければならない。これは徹頭徹尾肯定的な闘争である。一つ例を挙げてみよう。マルクス主義の基本書たるマルクスの『資本論』に事細かに反論し、それの論拠を別の論拠によって打ち破ることでは不十分なのである。そのような書が無効となるのは、シュペングラーが非常に適切に述べているように、論駁されることによってではなく、退屈なものとなることによってである。しかし**この**〔ナチズム――訳者〕運動だけが、今日、〔『資本論』と――訳者〕同様の権威と説得力を持つ書をもたらしうる力を発揮できる、未来のドイツ労働者運動となるだろう。我々の時代にドイツの意志を純粋に代表すると主張する運動に対しては、あらゆる時代の最良のドイツ的精神の持ち主たちに匹敵する男たちがその中に登場すること、これが求められなければならない。確かにこれは、相手方においてはまだ全く満たされていない、高い要求である。相手方にはなるほど強力な形式的才能が豊富に見出されるものの、新たな意志の兆しは全く見当たらない。しかしながら尺度を与えるのは相手方ではない。むしろこの尺度を与えるものは、歴史上のあらゆる偉大な革命に先行するところの、あの絶対的なまでの精神的努力である。このような絶対性が今日可能なのか、それとも不可能なのかは未決定であるにせよ、それが求めるに値するものであることは、どのナチ党員も認めよう。

この努力においてこそナチズムとナショナリズムは出会う。しかしながら、ナチズムが政治的組織としてのそれの特質において実際的な権力手段の獲得を必要とし、他方ナショナリズムの任務がそれと異なる、という相

違は残る。一方には理念を実現しようとする願望があり、他方には理念をできるかぎり深く純粋に把握しようとする願望がある。したがってナチズムにとっては当然ながら大衆が役割を演じるのに対して、ナショナリズムにとって数は意義を持たず、例えばシュペングラーのように民主主義によって鉄のごとき必然性とともに黙殺される人物が、議会における100議席よりも重みを持つ。

しかしこの相違は、個々の人間がただ思索だけをしたり、あるいはただ行動だけをしたりするのでなく、その両方を行うのと同様に、けっして同一の団体の中に存在できないような性質のものではない。ナチズムは、発展途上にあるがゆえに、間違いなく今後も少なからぬ変遷を辿ることになろう。この変遷の道程において、ナチズムは、経済的政治的根拠よりもいっそう深くにある根拠へと繰り返し立ち戻らなければならないだろう。

最強の武器がそこで鍛造されるべきこの根拠がナショナリスト的なものと呼ばれるとするなら、これに対して何か異議が唱えられうるであろうか。イエスという答えが挙がる場合には、これに代えて、ひょっとしたら、「たとえ権力政策的活動の必要にどれほど追われようとも、ナチズムは繰り返し自己自身の理念を思い起こさなければならない」というような言い方が用いられるのかもしれない。しかしまさしくこのような考え方の中にはっきりと示されていることは、ナチズムの理念の方がナチズムの組織よりもいっそう重大であり、翻って実際上もこれが組織を拡大する可能性へと通じる、ということである。私が確信するところでは、ナチズムの任務が新しいドイツの創造とともに終わると述べたとき、ヒトラーもまたこのことを考えていたのである。というのも、この言葉は、単に、純然たる権力闘争が決定的なものである、という意味には到底解しえないからである。この言葉を前提とするならば、むしろナチズムの理念もまた、ほかならぬこれこそがドイツの理念であると認められるようになるまで、深化と拡大を遂げなければならないであろう。

それが成功するとき ―― その成功を心の底から望まないナショナリストがいるだろうか ――、ナチズムの概念とナショナリズムの概念は当然

ますます融合していくことになろう。そのことは、理念的には、ナチズムが決定的な問題提起をますます自らの基礎に基づいて行おうとするようになる、ということによって示され、人的には、才能ある人びとがナチズムの増大する重力からますます逃れられなくなる、ということによって示されよう。

注

（1） ナチズムとの関係という問題に関して、しばしばユンガーとシュミットが同じ問題枠組において比較されるものの、ワイマール期からの経緯を重視する限り、ユンガーの事例とシュミットのそれとは問題の所在が異なる。後者の場合には、「なぜシュミットがナチズムに屈したのか」と問うことは適切である。というのも、シュミットは、ワイマール期に国家主義的立場からナチ党を反国家的集団と目して斥けておきながら、同党の政権掌握後、ナチズムのイデオロギーに適応させるべく、自らの国家観を根本的に改変していったからである。

（2） この関係は、後に『大理石の断崖の上で』（1939 年）においてユンガー自身によって主題化されている。この小説において、著者の分身と目されうる主人公とナチズムに擬せられた勢力たるマウレタニア人とは、かつて同じ秘密結社に属した仲間として描かれている。このことに留意するならば、この作品は、異質な敵に対する抵抗を主題とする「抵抗の文学」ではなく、むしろ自身の内的成長による「誤謬」の修正を目指した「自己克服の文学」と言うべきであろう。この作品の評価については、さしあたり次の拙稿を参照されたい。「エルンスト・ユンガーにおける政治と文学 ――『大理石の断崖の上で』について ――」、『創文』2000 年 6 月、1〜5 頁。

（3） Ernst Jünger, „Revolution und Idee“, *Völkischer Beobachter*, 23./24. September 1923, Unterhaltungsbeilage. ちなみにユンガーは、1923 年の春から夏にかけて度々ミュンヒェンに行き、同市に住む妹とルーデンドルフとを訪ね、その際ヒトラーの演説会にも足を運んでいる。Vgl., Helmuth Kiesel, *Ernst Jünger. Die Biographie*, Siedler, 2007, S. 269.

（4） Ernst Jünger, „Schließt Euch zusammen!“, *Standarte. Wochenschrift des neuen Nationalismus*, Nr. 10, Juni 1926, SS. 222–226.

（5） Vgl., Helmuth Kiesel, *op. cit.*, SS. 280f. キーゼルによれば、これ以後、両者が出会う機会はなかったものの、ヒトラーはユンガーに対する関心と評価を保った。オーバーザルツベルクにあるヒトラーの山荘の図書室にユンガーの著書『火と血』が収められてあり、そこにはヒトラーによる書き込みがあっ

た、という。Vgl., *ibid*.

（6） ユンガーは1945年5月7日付けの日記でこの出会いを次のように回顧している。「私は、いまフランケの家でなら博士〔ゲッベルスのこと ―― 訳者〕が秘義を打ち明けるだろうと考えた。しかし彼はもう一度同じ決まり文句を並べ立てただけだった。」Ernst Jünger, *Sämtliche Werke, Bd. 3*, S. 428. 他方、ゲッベルスはその日の日記にこう記している。「夜、ヘルムート・フランケの家へ。彼およびエルンスト・ユンガーと討議。私は非常に幻滅した。これが、プール・ル・メリット受章者ユンガーなのだ。骨軟化症。市民的勇気の欠如。」Kiesel, *op. cit.*, SS. 291f. その後もゲッベルスを窓口としたナチ党によるユンガーへの働きかけは続くものの、日記を見る限り、ユンガーに対するゲッベルスの否定的評価はこれ以降一貫している。最終的に失敗に終わった両者の交渉をゲッベルスの側から見てみるならば、ユンガーに対する彼のこの過剰に個人的な評価が交渉の進展を妨げたように思われる。ゲッベルスは、組織家としての高い能力を持つ一方で、なまじ文学的才能をも有したがゆえに、自分を圧倒する文学的才能を前にした嫉妬心から、ユンガーの政治的利用価値に関する判断を超える、無用の個人的評価に傾いてしまったのではなかろうか。

（7） Ernst Jünger, „Ntionalismus und Nationalsozialismus“, *Arminius. Kampfschrift für deutsche Nationalisten*, 1927, Nr. 13, SS. 8–10. なお、「ナチズム」という訳語の原語は„Nationalsozialismus“である。「ナチズム（Nazismus）」や「ナチ（Nazi）」は蔑称であり、ユンガー自身はこの論文の中でこれらの表現を用いていない。原文を尊重するならば、„Nationalsozialismus“は「ナショナルソーシャリズム」、„Nationalsozialist“は「ナショナルソーシャリスト」と訳すべきところであるが、これらの言葉の邦訳の慣行と読者の便宜とを考慮して、本稿では„Nationalsozialismus“を「ナチズム」、„Nationalsozialist“を「ナチ党員」と訳した。